

「自由」の観念をめぐる比較思想史

宮村 治雄

私はこれまで「比較思想」という観点から問題を考えるとという作業を自分の仕事として行ってきたとはいえない。したがって、「比較思想」という題目の講義を行う資格はないといえる。ただ、自分の専門として研究してきた日本政治思想史という領域には、いやでも「比較」という視点を不可欠とする要因がある。丸山眞男は、そうした日本の思想史の特色を、次のように語っていた。

「日本の思想史は、外来思想の受容と修正の歴史である。」（丸山眞男『講義録』第七冊、p.49）

だが翻って考えてみれば、こうした見方は、丸山だけのものではない。先行する優れた日本思想史の研究者の中でも前提とされてきたものである。例えば、津田左右吉は次のように述べている。

「日本の歴史の一大特色は、昔から日本民族がみづから創造したものでない、即ち異民族の、文物を学びそれを取入れることをつとめた点にある。日本の歴史は日本の民族生活の内からの発展としてのみ見ることでできない理由がここにあるので、日本の歴史に特殊な複雑性もまたここから生じ、日本の歴史を解釈するには特殊の用意がなければならぬのも、これがためである。」（津田左右吉「日本思想形成の過程」1934、『全集』21-p.153）

また津田をライバル視していた和辻哲郎も次のように述べている。

「我々は自国の文化をどれほど古く遡っても外国崇拜の痕跡のない時代に達することはできない。…
この特性は日本民族が優れた文化に対して極めて鋭敏な感受性を持つこと、及びかく感受せるものに対し己を空しうして学び

取るといふ謙虚な態度を持し得ることを示している。これあるが

故に孤島日本は、外国との接触が極めて僅かであったにも拘わらず、広汎な東洋の世界の最も優れた文化を咀嚼し、その地盤に於て自ら成育し得たのである。また印度と支那の文化がかほどまで深く浸潤していたにも拘わらず、一度西洋との自由な接触が始まるや否や、東洋のどの国にもまさって旺盛に西洋の文物を吸収し得たのである。だからこの特性は必ずしも日本の弱点を示すものではない。この特性の故に日本民族は、東洋文化と西洋文化との総合を否応なしに実現すべきやうな状況におかれた。もしこの総合が将来の日本民族の使命の重大な契機をなすものであるならば、右の特性はこの使命と連関するところが極めて深いのである。」(和辻哲郎「日本精神」1934、『続日本精神史研究』p.50)

このように、日本思想史には、「外来思想」の「受容」という持続する傾向があるために、その内在的理解のためにも、「比較」という視点は必要不可欠なものとならざるをえない。日本の思想史研究は、このような自覚と共に進まなければならない。日本の思想史研究は、この意味でなら、私もまた、「比較思想」という講義を担当することができるとは思えない。

しかし、さらに翻って考えてみれば、思想の歴史には、「受容」や「比較」の要素が伴うのは、なにも日本だけの問題とは言えないのかも知れない。『西洋政治思想史』の著者セイバインは、次のように書いてい

「この『政治思想史』はその主題を提示するに当たってもつばら西洋の伝統の内部における展開をとり上げている。それは西洋が孤立していたからではない。むしろ逆に西洋は始めからしてアジア諸民族から不断に大きな刺激を受けてきたのであって、多くの場合においてそれらアジア民族の文明は、ヨーロッパのそれよりも古い歴史を持つている。例えば西洋の生活と哲学に影響したあらゆる力のうちの最大のもの——キリスト教——はユダヤ教から出てきた。それと同じく西洋における思想に知的な骨組を与えた古代ギリシャ哲学にしても、エジプトと小アジアに由来する知識と觀念に刺激されたわけである。さらに後の時代にも、ヨーロッパ思想の最も特徴的な産物となる運命をもった科学の端緒は、やはり主としてエジプト人が伝えたものであり、またそこにはインドに発した色々の概念が包含されていた。すべて重要な文化というものは外部から来る種々の考え方を模倣し吸収する偉大な力を具えているものであるが、西洋の文化は恐らく他の大抵の文化よりも広汎に借りて来たのではないかと思われる。

けれども借りては来ても、諸々の文化は他面また自己独特の型をもっている。そうして、他の文化を吸収する場合にも、その外来文化を己の資質と己の環境に合うように変化・適応させ、また補足するものである。例えば西欧のキリスト教会は全くユニーク

な宗教制度であった。その特徴のうちの若干のものは政治哲学の形成に最も有力な作用を及ぼしたが、そうした特徴は東方教会のキリスト教思想さえ与り知らぬところであった。さらにまた、近代科学はその起源からいえば外部の影響に負う点少なしとしないが、その成長と発展・およびそれが近代社会において演ずるに至った役割・ということになると、最近に至るまではもっぱら西欧特有のもので、西欧文化の決定的特徴をなしていた。つまり西欧の政治理論が恰も自己完結的な単位をなして来たかのような書き方をしているのを弁護する根拠はここにあるわけである。

ヨーロッパ哲学二十五世紀の歴史は、もつと古い諸民族の経験から見れば、比較的短時日ともいえようが、しかし抑々の始めからヨーロッパ思想は、新規なものを吸収し環境の変化にその都度適応するという問題に、殆ど不断に直面してきたのである。その政治哲学は、ギリシャの都市国家・中世の教会Ⅱ帝国・および近代国民国家といった、それぞれ独自の政治構造と一団の特徴的な政治社会思想を伴った色とりどりの文明の間を架橋しなければならなかった。(中略)

こうしてヨーロッパの社会思想の裡には、おそらくその特殊な観点の特徴をもつともよく示す考え方がはぐくまれてきたわけである。それはつまり、政治哲学というものは現実の政治的情勢の環境の裡に産れかつ発達するものだという考え方である。そうした諸々のイデオロギーは、一国民の生活環境としての実際のおよ

び知的な諸条件が全領域にわたって設定した色々な問題に対する思想的反応にほかならない。」(ジョージ・H・セイバイン『西洋政治思想史』I「日本版への序」、丸山真男訳、岩波書店、1953)

こうしてみれば、「比較思想」という講義題目自身がとりわけ特別なことを要請しているのではなく、「思想」およびその歴史を考えようとする者にとつて、ごくあたりまえの態度を意味しているにすぎないともいえる。

以上は、この講義を担当するに際しての私の自己説得のための理屈である。それが自己満足に終わらない保障は何もない。しかし、始めなければならぬ。

幸か不幸か、近年放送大学の教科書として書いた『日本政治思想史——「自由」の観念を軸として』という本がある。これを教材にしながら、「自由」という観念をめぐる「比較思想」を考えてみる。これが、この講義の目指すところである。

日本語の「自由」には西洋語としての〈freedom〉や〈liberty〉の訳語という面のほかに、西洋との出会い以前からの中国思想や仏教思想のなかでの「自由」や「自在」との関連でもちいられてきた長い歴史がある。そうした歴史の中で、「自由」をめぐるさまざまな問いと応答とがどのようになされてきたのか、またそこから何をを学べるのか、考えたい。